書評

南　昌宏●

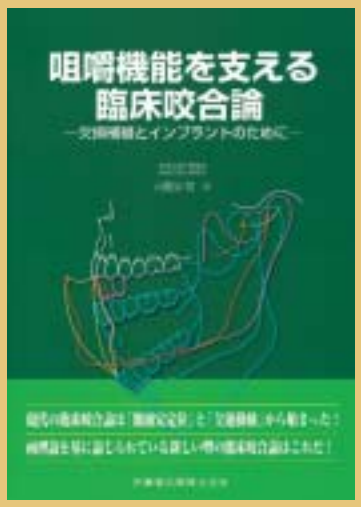
「咬合」が歯科の根幹をなすものであることは論を俟たない．補綴，矯正，歯内，歯周，インプラント，外科治療などさまざまな臨床分野に深く関連している概念である．しかし「咬合」を論じる時，どうしても臨床とかけ離れた抽象的な論議に陥りがちで，うまく臨床と結びつけきれず，結局「咬合はよくわからない」という声もよく耳にする．

そしてその論議の場，もしくは論文などで使用される用語の定義そのものが混乱に拍車をかけているようである．用語集を紐解いたところで，たとえ簡潔な説明がなされていたとしても，全く明解でなく，どのようにでもとれる玉虫色の説明がなされていることが多い．典型的な例が「中心位」に関する記述であろう．

この度上梓された河野正司先生の著書に解説されているように，「中心位」は米国歯科補綴学用語集において，第4版までの後退位から第5版では前上方位に大きく様変わりを遂げ，第7版では前上方位と後退位の併記とみられる表現へと変化してきている．本書の第2章において，河野先生とJ. Preston教授とのパーソナルコミュニケーションを通してそのあたりの背景が解説されていて，「中心位」の定義の経緯が非常にリアルに伝わってきており，興味深く，わかりやすかった．

さらに「咬頭嵌合位」と「中心咬合位」についても，歴史的背景やその意味と違いについて，日米の用語集をふまえて丁寧に解説されており，咬合を論議，考察するうえで大変参考になった．

咬合論が隆盛を極めつつあった1960～70年代，当時は「ヒンジアキシス」，「中心位（最後退位）」に代表される機械的咬合論が席巻していたなかで，河野先生らが論文発表された「全運動軸」，「顆頭安定位」の概念は，斬新でエポックメーキングなものであると同時に，大変勇気のある研究であったと拝察され，畏敬の念を覚えるものである．これらは現代の臨床咬合論の礎となるものであり，本書はそれら研究の集大成であると言えよう．



咀嚼機能を支える臨床咬合論
―欠損補綴とインプラントのために―
河野正司　著
A4判　240頁　定価13,650円（本体13,000円＋税5％）
医歯薬出版株式会社刊

第2章では，大石忠雄先生の唱えられた「顆頭安定位」についてその詳細が述べられていて，機能解剖学的な観点から臨床上適切な基準位を提案され，その臨床での採得法が示されている．さらに第3章では，その研究を間近に見ていた河野先生が実際に手指で下顎頭の運動感覚を実感したことがヒントになり，「全運動軸」を発見され運動解析がなされたとの記述は大変興味深く，すべてつながっていた研究であったことが理解できた．そしてその後の「歯のガイドと顎機能」の研究（第5章）など，常に臨床に立脚した研究が解説されていてわれわれ補綴臨床家にとっておおいに参考になるものである．

また，はじめに臨床編として診断から咬合器の使用法，歯のガイドをどうするかということなどが提示され，その裏付けの研究や詳細が後に続く基礎編で解説されるという，通常とは逆の構成も大変読みやすい．インプラントにおける咬合，高齢者と咀嚼なども網羅されて現代の補綴臨床に即した内容になっており，臨床家必携の書である．

（みなみまさひろ　〒530-0047　大阪市北区西天満2-6-8　堂島ビルヂング1階　医療法人皓隆会　南歯科医院　Tel：06-6315-0111）